

〔論文〕

家庭的保育から小規模保育への変遷と動向

大江 由香
Yuka Ooe

大阪総合保育大学大学院
児童保育研究科 児童保育専攻

近年待機児童対策として、0～2歳児を預かることのできる小規模保育所が増加傾向にある。小規模保育は、0～2歳児にとって少人数で預かってもらえることから、家庭的な保育実践が行われるといわれている。先行研究では、従来の家庭的保育所の変遷や小規模保育所の量的調査は散見される。しかしながら、保育内容に関する調査は皆無に等しい。本論文では、小規模保育の保育内容に視点をあて、「家庭的な保育実践」とは何かを探ることで小規模保育で行われる保育の目指す動向を探ることを目的とする。保育所保育指針の平成30年改定では、乳児保育についても記載され、乳児保育における生活や遊び場面において個を大切にしながら行われる保育の環境、そしてその活動の中での保育者の関わりについて着目していく。

キーワード：家庭的保育、小規模保育、少人数保育、乳幼児保育

I はじめに

本文中の小規模保育は2015年の認可時に地域型保育事業の中の小規模保育事業である小規模保育園を指し、家庭的保育は家庭的保育事業での家庭的保育を指すこととする。

近年、乳幼児保育が注目される中、保育の需要としても高まり待機児童まで出してしまう乳幼児保育。その中の乳児保育において保育という歴史とともに必要性があり行われてきた。昭和の初めには農家の繁忙期のみ預ける季節保育所であったり、昭和に入り戦争により増えた母子家庭にとっては生きていくために必要であった乳児保育である。そして1958年頃から共稼ぎ世帯の増加により乳児保育の需要拡大に伴い、保育施設としてわざわざ建物である施設を用意しなくても預かることができるという利便性からも、受託者の居家で保育することができる家庭的保育が広まっていった。これは乳児保育では個別な対応、応答的な対応が必要で、養護の部分が大きく生命の保持の面からも環境的にもより家庭に近い家庭的保育が拡大していった背景となった。小規模保育としては国が1968年に「小規模保育事業の設置認可について」という通知を出したことで、定員30名以上60名未満でも認可する方針を打ち出したことで正式に位置づけた。

2016年子ども子育て支援新制度になる以前の家庭的保育は自治体による委託事業として、その独自の保育運営であったものが、国の制度化になることで保育運営も一定の基準が定められ、家庭的保育の少人数であるがゆえの臨機応変に対応できる日案メインであった保育の良さから保育園型の全体的な計画、年間指導計画、月案週

案をたて計画により計画通りに保育をしていく保育園型の保育へという形への保育へと変化してきたことで保育の内容も変わってきている。

解消されない待機児童対策として、より多くの子どもを預かることができ、都会の待機児の多い場所でも安易に始めることができ、民間企業からの参入を容易にしたことでこの子ども子育て支援事業の中の地域型保育事業に位置づけ、一気に家庭的保育から小規模保育へとその需要は変容し続けている。この子ども子育て支援新制度を検討していく子ども子育て会議基準検討部会が2013年からその認可基準の検討をする中でも、小規模保育の検討を家庭的保育と保育園のその間の保育として検討され決められ、家庭的保育の方が歴史的にも長いことから基準として考えられていた。その小規模で行われる保育は少人数であり配置基準的にも手厚く、家庭的な良さを活かしながらも保育園の保育を担保する専門知識を持った保育者がする保育という質を確保するもので、子ども子育て基準検討部会の小規模保育事業として決定された子どもの個別性を重視した応答的な関わりで行われるものとかけ離れた部分がある保育園型の時間で一斉に子どもを動かす保育が行われているのではないかと。少人数であることを活かし個別対応をメインに子どもが自己を発揮しながら家庭的な見守りにより子どもが主体で保育が行われている所と、3歳未満児でありながらもそれは3歳以上の保育と同じような一斉保育型で行われ保育者が子どものできるできないの判断した声かけで行われている保育とが見受けられる。本研究ではその日々行われている保育の実態をビデオ分析し、0～2歳の発達の個人差も大きい時期でその個別性を大切にしたい保育が出来

るであろう小規模保育で行われている保育について検証していきたい。

1 先行研究より

「家庭的保育」について CiNii で検索すると 154 件あると出てくる。先行研究を検索していく、実態調査をされたものでは保護者に対するものや、家庭的保育者に対するものとして食物アレルギーのことを調査されたものや保育サービスとしての質の調査をされたものや、家庭的保育のあり方に関する調査として小山・庄司・尾木・齋藤・須永・網野・福川・鈴木・上村・高辻（2008）が 6 年間に渡って継続的に検討され、全国的な調査で行われ家庭的保育は事業としてどう成り立つのか、質の担保の在り方、行政の対応などの調査をされている。家庭的保育制度の変遷と家庭的保育制度研究の動向として五十嵐（2017）は家庭的保育の歴史や行政、自治体との問題を取り上げたものもある。3 歳未満児の健康生活に関わる家庭的保育者の支援として佐野・高尾（2015）では 3 歳未満児の生活習慣形成において保育者の役割やその個人の質について調査されている。その他にもその保育環境についての研究で、戸外活動についてや保育施設として、そして近年ではその地域資源の活用の調査研究されているものがある。そして特に多いものは家庭的保育という視点からも海外では古くから乳児保育はベビーシッターで保育されていることが多く海外各国と比較されている研究も見られる。認可前では自治体ごとに「保育ママ」「家庭福祉員」と位置づけも違い、その地域ごとに調査研究されてきたものも多く、2015 年に家庭的保育では認可され「家庭的保育者」と位置づけられたが、その実態としての保育内容や保育の質は自治体によっても基準がバラバラであるため、保育の内容に踏み込んだものはないようであった。

CiNii で「小規模保育」での先行研究を検索すると 2 年前では 57 件該当と表示されていたが、この 2 年小規模保育園の増加に伴いその論文も 116 件と増加している。

その主なものは建築学会での論文で小規模保育の施設の設置場所や都市部における施設、室内空間に関するものが主である。

そして次に多いものが制度に関するもので、子ども子育て支援新制度関連のものでこれはやはり 2015 年子育て支援事業が始まった以降に書かれたものだった。それ以前のものも 6 件あるが、それは過疎地における小規模な保育を比較・検討されたものである。

次に保育の方で書かれている保育室の保育空間の環境について書かれているものであり、小規模保育事業実施

の現状に関するもので辻川・吉住（2019）のものから、都市部における保育環境の在り方として検討されているものが他の 6 件である。小規模保育の立地や園庭、保育室の広さその保育環境に焦点が置かれている。

次に食育の側面から検討されているものが、2 件。小規模保育園における食育の取組として伊藤・小野・倉園（2019）や施設における食物アレルギー対応に関する調査として本田・西川・下山・永井（2015）のもので、大規模保育のような給食施設も大掛かりなものでない小規模保育での給食の実態についてアンケートによる質問紙調査を行ったものであった。

その外にも保護者側からみた小規模保育ということで小規模保育及び家庭的保育の事業者及び保護者調査からの現状と課題として米倉・永井・佐藤（2019）で小規模保育に対するイメージや実際利用してみよう変わったかという調査であったり、周辺業務から保育現場の負担軽減や地域ボランティアとの連携として實川・北田・栗原・高木・山田・高野（2020）という論文の中で小規模保育園を対象に質問紙調査を行ったものがある。

ここで保育内容に触れた論文を探すと、保育方法の実践的検討として子どもの自主的活動と職員集団の援助との関係で中村（1990）ではこの当時の社会の変化を踏まえ、失われつつある「昔の大家族のようなシステム」をモデルとした子どもの要求に基づき保育者が相互に援助し合える実践活動を報告されたものであった。

小規模保育所の保育のあり方として本橋・井桁・小野・佐々木・跡見・宮崎（1983）ではナースリールームの過去 15 年間の小規模保育としての保育実態を振り返りその資料や記録をまとめ、卒園児が次の保育集団の中でどのように適応しているか実態をとらえ、3 歳未満児保育のあり方を考察されたもので、この 2 つの論文が保育の内容や実態を捉えたものではないかと思われる。

2020 年以降では園環境の施設の現状を調査したものとしては秋田県における現状と課題として佐々木（2021）、商業ビルの一室である小規模保育施設の事例として吉次（2020）があり、保育の内容のものもこの 2 年ほどで見られ、小規模保育園における自然とのかかわりによる乳幼児の育ちを研究した上月・幸田・萩原・横谷・坂田・山下・遠藤・藤丸（2020）、子ども主体としての心を育てる保育として自己充実欲求を焦点にした幸田・武田・吉次・萩原・横谷・坂田・山下・遠藤・藤丸（2020）、子どもの自発的な造形活動として藪（2020）などがあり、小規模保育での子どもの育ちに焦点を当てたものも出てきた。その他には保育士間連携の考察として成木（2020）、保育運営と施設計画に焦点を充てた辻川・吉住（2021）、株式会社として職業としての保育を検証

したものとして小林(2020)、の保育園としてのその内部である保育者間のことや運営のことへも焦点をあてたものであった。新川・中山(2018)では小規模保育における実態調査として29市町村へアンケート調査を行ったものもあった。

先行研究からも、園の実態調査として保育の内容までを検討したものはないため、本研究では実際に行われている小規模保育の保育の内容を調査することを考えた。

2 研究の主旨、対象

本研究を行うにあたり、小規模保育園での実態を知るためにS県内5園の2歳児クラスを対象にビデオ撮影による保育の内容の比較をすることとした。小規模保育では少人数であることの利点を活かし、個別対応で子どもの興味に合わせて生活することができる園と、少人数でありながらも一斉型の保育に子どもを当てはめて動かす保育になっているところもあり、小さい規模であることで家庭的のような個別的な臨機応変に対応できる保育環境でありながら、0～2歳の発達の個人差も大きい時期でその個別性を大切にされた保育が出来るであろう小規模保育での実際の保育を調査してみることにした。

(1) 調査対象

2020年のコロナ禍で私自身にも行動制限のある中でS県内で多くの園に依頼したが主旨を御理解いただき快く協力していただける園が5園であったことと、2歳児に焦点を絞った理由は、2歳児は大きい園では3歳児のミニ版と考えられることがあり、3歳児のような保育と2歳児ならではの保育が混在している現状を見かけることがあるためである。

- A園(大規模保育園)以前から認可されている保育園を定義している通り、今回社会福祉法人の大規模な定員140名のこども園2歳児19名、職員4名。保育室面積49.8m²。
- B園(小規模保育A型)社会福祉法人の分園。定員12名。保育室面積49.76m²。1戸建ての古民家を改装して園として利用。今回は2歳児6名、職員2名を対象とした。
- C園(小規模保育B型)個人営。定員19名。保育室面積54.11m²。今回は2歳児3名(うち2名は欠席)、職員1名を対象とした。
- D園(小規模保育B型)個人営。定員19名。保育室面積24.84m²。建物から専用で建てられ小さいながらも遊具園庭がある。今回は2歳児6名、職員3名を対象とした。
- E園(小規模保育C型)個人営。定員8名。保育

室面積29.82m²。今回は2歳児5名、職員3名を対象とした。

(2) 調査方法

- ① コロナ禍により園内への立ち入りが制限されることもあり、後日並行性を持って比較するため、研究の主旨を御理解いただき、子どもにも意識されにくい小型のものでのビデオ撮影をさせてもらうという方法を用いる。
- ② 撮影時間は概ね8:30～11:40のうち3時間程度で、回数は1回のみ撮影。通常の様子と齟齬がないか、インタビューにて確認する。
- ③ 一部撮影日当日になり欠席児が過半数を超えて出てしまったため、日頃の様子を聞き取りにより、検証している。
- ④ 撮影したビデオの読み取りは1人で行い、保育者の声かけで子どもの活動が変わる場面のタイミングを始点と終点にして、午前中の撮影のみだったためその活動の変わる場面のタイミングの切り取りごとに検討すると10の場面が検討された。そこで、登園場面、朝の用意、自由遊び、排泄、手洗い、おやつ、衣服の着脱、朝の活動、絵本、戸外活動前という分類により検討することとし、その際活動別に分類の型を作り、その分類は保育園型保育に近いものなのか、家庭的保育に近いものなのかということから分類分けしていくこととする。

3 倫理的配慮

本研究において行うビデオ撮影・インタビュー時の倫理的配慮についてビデオ・インタビュー検証は研究以外の目的には使用せず、研究の公表にあたっては保育園や個人が特定されないことを文書にて説明し、保育園、保護者双方に文書での同意を得ている。

II 保育場面における指導法の比較

この章では、A園からE園の保育の活動場面別における保育内容の比較について記録をもとに分析を行う。

1 登園時の受入れ

まずは登園時の受入れについて着目する。次の分類を使って検討していく。

表1 保育者と保護者との関係の分類型

必要最低限型	積極的関心型
時間的にも園の方針などから双方が必要なことのみの会話を必要最低限型の対応	双方に関心を持ち、些細なことを話し合える関係性 時間的にもその分余裕を持って送迎している

- (1) 【A園】 A園では園庭側のテラスに靴箱があり、そこで園児も靴を脱ぎ靴下を靴箱内の箱に入れてから入室する。保護者はその靴下が脱ぎ終わるのを待っている保護者もいれば、保護者だけで入室してくる人もいる。朝の挨拶をし、子どもの用意を素早くこなし、すぐに出ていく傾向が見られた。保護者側から話がある場合と、保育者側から話がある場合は少し会話を交わす保護者も見られた。今回観察時間が早出の時間帯ではなく、2歳児の保育室に登園されてきているため、担任と顔を合わせることができる時間帯であったが滞在時間は1～2分程度の必要最低限型であった。
- (2) 【B園】 B園では古民家である玄関チャイムを鳴らし、モニターで顔を確認してから玄関の施錠ロックを外して玄関まで入ってくる。A園の分園的であるB園でもA園と同じ傾向で保護者は手早く用意をするとすぐに出ていくようで1分から2分程度でほとんどの保護者は足早に出て行っていた。だが、保護者の中に保育の様子を見て欲しいとのことで登降園の際、保育室内に保護者が入っている。子どものことで気になることがあると、少し会話を交わして、保育者と保護者が向き合っている姿は特に見られずこちらも滞在時間1～2分程度で必要最低限型であった。
- (3) 【C園・D園は聞き取りによる】 C園はD園は認可園になる前からの以前の園での理念を引き継いでいることから、保護者が「おはようございます」と入ってきた時から会話のやりとりを子どもが靴を脱ぐ間、現在は玄関先で行っている。これは室内に入って保護者が朝の用意をしてその間話していたものが、コロナ禍で玄関先に変えたようである。早出の先生も毎回同じ保育者で見知っていたり、担任にも比較的会いやすく、どちらの園も保護者支援に力を入れている理念を持っているため、朝の挨拶だけでなく保護者とのやりとりが見られた。滞在時間は3～6分程度で積極的関心型と必要最低限型が混在していた。
- (4) 【E園】 E園では玄関先だが朝から保護者とのや

りとりする時間は一番長い傾向で、滞在時間は5分～7分程度であった。登降園時も日中の保育をしている同じ保育者が毎日対応するため、保護者自身の園に対する身構えなどはなく両者の距離が近い積極的関心型であった。

- (5) 【考察】 1の朝の受入れ時についてまとめると、A園、B園では挨拶を交わす程度で保護者が入室し、用意し足早に出ていく様子が見られ、朝の忙しい保護者の時間を配慮した必要最低限型であり、保護者保育者のどちらかが話しがある時には話していく様子であった。2015年以前D園は家庭的保育であったり、C園は無認可であったその当時から保護者支援に力を入れているため保育者の方から話しかけることが多く、コロナ禍で室内に立ち入らなくなったが、玄関先でも会話することを大切にしているとインタビューから伺い、両園とも積極的関心型の方がやや多く必要最低限型の保護者もいる。E園でも家庭的保育の時から保護者と毎日子どものことをしっかり話す体制が双方にできているため、2歳児になってからは玄関先で別られるように玄関先であるが、朝の受入れからもじっくり話し、相互の関係の垣根は低い関係のように窺えこちらも積極的関心型であった。

2 朝の用意

次に朝の用意について着目する。次の分類を使って検討していく。

表2 用意をどちらがするかの分類型

保護者主導型	自立助長型
保護者が主導して用意をする	子どものやりたい気持ちを汲みとり、自分でやらせていく

- (1) 【A園】 A園では保護者が行っていく。子どもは室内に入るなり遊びにすぐ参加したり、保護者の周りにくっついていたりしながら用意が行われ保護者主導型であった。
- (2) 【B園】 分園的なB園でも同じ理念の下行われているため、保護者が連絡帳、着替え、食事の口拭き、エプロン、歯磨きセットなど用意をしている。手拭きタオルはペーパータオルのため使用していない。B園でも子どもの様子は同じですがすぐに遊び始める子どもと保護者の周りにくっついて子どもがいるが、子どもにすぐに保育者が声をかけるとスムーズに別れて遊び始め、用意は保護者主導

型であった。

- (3) 【C園・D園は聞き取りによる】 C園、D園でも以前は朝の用意も保護者がしていたことが、コロナ禍で室内に入らなくなったため、子どもができることは保育者と一緒に用意をしており、自分で1つずつ朝の用意をするような自立助長型になっていった。連絡帳や手拭きタオル、食事に使うタオル、食事エプロン、歯磨きセット、着替えを片付けていく。
- (4) 【E園】 E園では常に縦割り全員一緒の生活スタイルであることから、2歳児は朝の用意も自分でできておりカバンから1つずつ自分で出して用意している。2歳児が朝出しているものは7種類ほどを分別して出している自立助長型であった。2歳児になると食事エプロンを使用していない。
- (5) 【考察】 2の朝の用意についてまとめると、A園、B園では保護者が室内に入って手早く用意する保護者主導型で、用意するとすぐに出ていく様子が見られ、子どもは靴、靴下を片付け入室していた。C園、D園ではコロナ禍で室内に保護者が入ることをやめたため、以前は保護者に用意してもらっていたものを現在では子どもと一緒に用意する（自立助長型）ようになったとインタビューから伺った。E園でも自立助長型ではあるがその開始時期が0歳児の興味が出た時から1つずつ増やしているので、2歳児の今では自分でできるようになっている。用意についても、手拭きタオルがないところもあり、持ち物の違いもあるが、自分でできるよう1つずつ時間をかけているところと、3歳児以降になってから、という違いが出ている。

3 朝の自由遊び

次に朝の自由遊びについて着目する。

- (1) 【A園】 A園では保育室面積49.8m²の中に個人ロッカーで間仕切りをしているのみでその広い空間を十分に使い、子どもたちは自由に動き回って自分の好きなおもちゃの車を出して遊んだり、保育者との触れ合い遊びで「なべなべ底抜け～」を順番に待ってしてもらっていたり、「もったいないばあさん」の絵本を膝で読んでもらう子どもの横で一緒に見ている子ども、ままごとでお料理を作ったりそれを先生に食べてもらったりしている子どもも居れば、太鼓の音が鳴ってくると室内の廊下側の入り口まで走ってきて（そこからは出てはいけないう約束となっている）それを覗いて見たり、1人が寝転がるとその上に何人も乗ってみたりし

て子ども同士で遊んでいる。子どもの人数に対して一緒に遊んでいる保育者は2名で他の保育者は室内を動き回りながら保育の用意などをしているので、保育者とのやりとりをしている子どもよりも、子ども同士の動きから遊びが成り立ち空間の広さが遊びの広がりや友達との遊びを助長させると感じるものがある。

- (2) 【B園】 B園では保育室での家具が扉の中に入っているため保育室面積そのまま広々感じる保育室であるが、それぞれ4名の保育者のいるところに子どもも寄ってきて遊んでいてそれぞれが保育者とのやり取りをして遊んでいる。1人の保育者が何人かの子どもと関わっているため、保育者は遊びながらもそれぞれの子どもや部屋全体の子どもの様子に目を配っている。
- (3) 【C園】 C園では室内とほぼ同じサイズの大きなサークルがありその中で1歳児2歳児が遊んでいる。出入りしている保育者も入れると5名の保育者がビデオ撮影に緊張気味であることからその保育者に影響されているのか、1歳児はずっと膝に抱かれてまったりと過ごしている。2歳児は大きいサークル内を走ることができ声を掛けられるとそれに応えて会話をしている。
- (4) 【D園】 D園では朝の用意をしてから、保育室内にあるおもちゃや絵本で3名の保育者とのやりとり遊びをしている。危険のない程度走り回ったりすることもできていた。
- (5) 【E園】 E園ではさらに保育室が家庭に近く室内に家具などもあるため実際の保育面積は狭いため3名の保育者と子どもが近くに集まりそれぞれが好きなおもちゃを自分で探しては出し入れしながら好きな場所で遊んでいる。型はめを持ってきた子どもに「これどーこだ」と言われ、保育者は「どう？ここかな？」、子ども「ざんねーん」と対話でのやりとりからも窺え家庭のような関わり方がそこは影響している面ではないかと考えられた。
- (6) 【考察】 3の朝の自由遊びについてまとめると、保育環境により遊び方に違いが現れていることがわかる。分類して検討していくと次の表になる。

表3 自由遊びの分類型別

遊び環境	遊び場所	おもちゃ	人的環境
A園	自由	自由	子ども同士>保育者
B園	自由	制限	保育者>子ども同士
C園	制限	制限	保育者
D園	自由	自由	保育者
E園	自由	自由	保育者

A園では広々と動き回りながら遊べるところでは、友達同士の関係で遊んでいるところが多く見られ保育者と遊んでいる子どもは数名であった。保育室の狭さやこの時間ここで遊ぶと設定されている場所が狭いと、保育者も子どもも自然と近くに寄って遊んでいる状況が窺えた。B園、C園、D園、E園では保育者と関わりながら一緒に、という遊びが見られた。B園では保育者の周りには1人～3人の子どもが居て、やりとりを中心の会話をしながら、それも質問形式だったりして言語の助長を促す言葉かけで遊びが展開されているが、子ども同士で遊ぶこともあった。C園、D園、E園では保育者と子どもが1対1で遊んでいる姿か、1人で没頭して遊んでいる子どもであった。保育者の1人の子どもとの会話の量は保育者の人員配置基準による部分もあるが、保育者が担当以外の子どものも全体を見る人数が少ない方がその対話も多く見られる傾向である。

4 排泄

次に排泄について着目する。次の分類を使って検討していく。

表4 排泄時の対応分類型

個別対応型	時間一斉型
個々に自由度があり、自分で決めて行くことができる	時間で声をかけ、トイレに一斉に促す

- (1) 【A園】 A園でも個々の発達や意欲に応じてトイレトレーニングをしているが、無理なく進められていた。外へ行く前などにはパンツの子どもには声をかけ、もう一度トイレに行くように促されていた。トイレ内の牛乳パックの椅子に腰かけてズボンパンツの脱ぎ履きをしていた。ほぼ半数での個別対応型と一斉型の融合であった。
- (2) 【B園】 B園でも同じ傾向ですすでにできている月齢の早い子どもと月齢の遅い子どもとがいた。個別に誰から行くのが保育者の促しで決まり、個別にズボンを履いたままずらしてすることができる

子ども、トイレの中に牛乳パックの椅子が置いてありそこに腰かけてズボンの脱ぎ履きをしている子ども、まだまだオムツで過ごす子どもは1人個別に対応していた。時間一斉型では5人誘導していた。

- (3) 【C園】 C園でも個々に合わせ進められてきたが、縦割りで室内にいるために1歳児への促しやお手本のように2歳児の排泄の様子を見せる意味も込めて一斉に行っているとインタビューからも窺えた。トイレ内の牛乳パックの椅子に腰かけてズボンパンツの脱ぎ履きをしていた。当日は1人であるが日常は3人を時間一斉型で対応している。
- (4) 【D園】 1歳児と2歳児と共有のトイレである構造のため、また時間で交替で使用しているため、一斉に促している。個別にもぞもぞしている時には保育者が察知して促している。パンツやズボンもトイレ室内で履く場所を設けて座って履いていた。時間一斉型として6人を促していた。
- (5) 【E園】 一斉に促す時もあるが、それは順番の経験をする機会としての一斉にトイレに行くという経験で、個々の排泄のタイミングで行く。5人一斉に声をかけることもあるが、自分で今行きたいかどうかを決める個別対応型である。パンツズボンは立ったまま壁に背中をもたれて履いていた。
- (6) 【考察】 4の排泄についてまとめると、A園ではトイレトレーニングが出来ている子どもとまだ出来てない子どもがいることで個別に対応。出来ている子どもは一斉の声かけでトイレに行き、来ていない子どもはその時々でトイレに行ったり行かなかったりしていて、個別対応型と一斉型であった。B園、C園、D園では時間を決めて一斉に促す時間一斉型が主だが、その進捗は個別に対応されている。C園は1歳児との縦割り保育であるため1歳児へのお手本としても一斉に促したり、個別に行きたいという思いでも行っている。D園は年齢別クラス運営をしているので、2歳児だけで一斉に行く時と、個別に行きたいタイミングを察知して声をかけている。E園では一斉に声をかけることもあるが、自分で行きたいと言うタイミングで行くことから個別対応型であり、その排泄の仕方や、その衣服の着脱にも個々に違い個性も窺える。

5 手洗い

ここでは手洗いについて着目する。

- (1) 【A園】 コロナ禍で特に手洗いはどの園も徹底され

ている。

A園でもしっかり手洗いについて指導されていたようで、子どもが1人で洗っていても丁寧に手を洗う様子が見られ、手をペーパータオルで拭くところまでを個々で行い、全員がちゃんとできたかを保育者が1人1人とタッチをしながらさりげなくチェックし、人数確認もされていた。

- (2) 【B園】 B園でも手洗い指導はされていたようで、1人で洗ってペーパータオルで拭いていたが、これは縦割りで生活しているからこそ1歳児の頃から丁寧な手洗い指導をされているため、1人で洗っていても丁寧に洗うことができている、1歳児を見ても保育者がそばについて一緒に洗いながら丁寧な洗い方をしめしたり、一緒に手を添えて洗ったりされていた。
- (3) 【C園】 C園では縦割りで1歳児も2歳児も手洗い場でしっかり手を持って保育者が手洗い指導をし、洗い終わりタオルかけのところに行くと、保育者がそこにもついて一緒に拭けていないところは拭きながら気づかせてあげていた。
- (4) 【D園】 D園でも手洗いの導線にタオル掛けを運んで行き、1人1人について手洗い、手拭きまで保育者が見ている中で手を添えたりする子どももいた。少し嫌がる子どもには1人の保育者がずっとついて一緒に行っていた。
- (5) 【E園】 E園も手洗いは縦割りで生活してきているため、2歳児になると保育者が見ている中自分1人で行っているが丁寧にできていた。手を拭く際もさりげなく見ていて拭けてないところを気づかせていた。
- (6) 【考察】 5の手洗いについてまとめると、コロナ禍でペーパータオルを使っているところと、今まで通りの自分のタオルをタオル掛けにかけて使っているというところと違いを感じた。手洗いはどこも丁寧にされており、手を拭くことまで保育者の立ち合いの元で意識されていた。何人もの子どもを確認する方法では手洗いが終わった子どもから保育者に1人1人タッチすることで手を握ってしっかり拭けているか洗えているか確認しているところと、その場で1人1人の様子をしっかりと見ることによって確認しているところがあった。

6 おやつ

ここではおやつについて着目する。次の分類を使って検討していく。

表5 保育者と子どもの主体分類型

保育者主導型	子ども主体型
保育者がそのすべてを決めて順番に進めている	子どもがその中でも自由に決めることができ、自分で出来ることは自分で片付ける

- (1) 【A園】 A園では牛乳もおやつも全部配ってあり食べ方食べる順番は選べるようになっている。袋も自分であげられる子ども、できない子どもには一緒にやってみようと一緒に開けていた。終わったら保育者がお皿、牛乳の入っていたコップを下げ、歯ブラシと自分のコップにお茶を入れたものを渡し、歯磨きを自分でした後、保育者が1人1人に仕上げ磨きをしていた。食事場面では子どもも主体型であるが、片付け等は保育者主導型になっている。
- (2) 【B園】 B園では席についてから牛乳が配られ牛乳を飲んでコップを片付けてからおやつを食べそのお皿を片付けてからお茶と段階を踏んでいた。1歳児と一緒に食べる縦割りになっている。口拭きタオルで口を拭いてから、牛乳パックに名前が書かれたものを渡され、次にナイロン袋を渡され自分でその牛乳パックに袋を開けてセットし、その中に口拭きタオルをしまうことをしていた。食事場面では保育者主導型だが、片付けになると子ども主体型の部分もある。
- (3) 【C園】 聞き取りによると、席につく時には揃えて置いておくが個々の好みに応じて臨機応変に対応している。苦手な物では先に声をかけ進めたりすることもある。すべて保育者が配膳する保育者主導型であるが、食事場面では子ども主体型の部分もある。
- (4) 【D園】 D園では席についてから配られたおやつを食べ、その後牛乳をもらう。年齢別で食べるため少人数の6名で食べていた。保育者が3名でその介助をしていた。少しご機嫌斜めの子どもにはマンツーマンで接して関わっていた。食事場面では保育者主導型であるが、片付けでは口拭きタオルは自分で食後片付けにロッカーの袋へ入れるなど子ども主体型の部分もある。
- (5) 【E園】 E園はA園同様席につく時には全部机に置いてあり、子どもが選んで食することができるようになっていた。子ども自身が気をつけながら食べられるよう給食時のエプロンも使用していない。食後の食器はすぐそばの給食室まで自分で「ごち

そうさまでした」とコップとお皿を片付け、口拭きタオルを自分でロッカーの上の袋に入れに行くことから、食事場面では子ども主体型、そしてその後の片付けなども子ども主体型になっている。

- (6) 【考察】 6のおやつについてまとめると、おやつではどの園も2歳児になるとエプロンをつけて食べることもなく、配膳の仕方にそれぞれの違いが見られた。これは園の慣習が大きく出ている部分ではないだろうか。B園、C園、D園ではおやつ、牛乳と一つずつ食べ終わってから渡すという保育者主導型のところと、A園、E園では子ども主体型で全部揃えて置いてあり、そこへ子どもが来て座り子どもが食べる順番も決めて食べることができていた。保育者が食べ終えたお皿を片付ける園がほとんどであったが、E園では子どもがすぐ横の給食室の入り口の台へお皿コップを運んでいき片付けるという違いも見られた。口拭きタオルを自分でしまうこともしているが、どこでするかどこに片付けるのか、その場所や片付ける位置の距離的な違いも見られた。これもどこまで自分で片付けるのかという保育者の線引きの違いが出ている。

7 衣服の着脱

ここでは衣服の着脱について着目する。6の型の分類を使い分類してみる。

- (1) 【A園】 子どもから汚れたと訴えて来た子どもには少しの声かけで自ら着替えに行き自分のロッカーの前で着替えている。保育者に着替えることを促された子どもは保育者が服を持ってきて着替えを手伝っていた。脱いだ服でも自分で片付けに行く子どもと保育者が全て行い脱いだ服も袋に入れる場合があった。保育者主導型から子ども主体型へ個々に合わせ徐々に変化していくようで約半数の割合であった。
- (2) 【B園】 濡れたと訴えた時と、保育者が着替えを促した時があり、自分で見つけに行きサッと着替える子どもと保育者が持ってきたものを着替える子どもがいた。B園でも保育者主導型で2人の子どもが着替え、自分で出来る子ども4人は子ども主体型で着替えることができる柔軟な対応であった。
- (3) 【C園】 汚れたことを訴えたり、汚れたことに気づかない子どもには声をかけ知らせ保育者側から促して着替えることもあるが自分で着替えを持ってきて着替えている。どうしても決められない子どもは2つぐらい持ってきてどちらが良いが選ば

ていた。こちらも個別に対応していて、保育者主導型と子ども主体型が混在している。

- (4) 【D園】 自分で訴えて来たり、こちらから促して着替えることもある。自分で決めて着替える子どもは片付けまでして着替え、まだそこまでできない子どもは2つのもので選択させて着替えられるようにしている。そばについて、できない部分をさりげなく手伝っている。保育者主導型の子どもは2人ほどで、他の4人は子ども主体型で自分でしている。
- (5) 【E園】 自分で汚れたこと、汗をかいたことに気づき着替えることも選択している。どうしても見えない後ろの部分の汚れは知らせると着替えをする。自分で選んで着ているが、やはり発達の個人差で次は何着る？と声をかけることもあった。5人とも子ども主体型でできていた。服の後ろ前や前後について確認しながら違っていると気づかせる声かけをしている。着替えができていない子どもは衣服の片付けも畳んでから袋に入れるところまで身につけていて、子ども主体型でも保育者の見守りはされていた。
- (6) 【考察】 7の衣服の着脱についてまとめると、園の方針などもあるが、子ども自身でできること、できないことの保育者の線引きが園によって違うことがわかる。まだできないので保育者がする、2択で選ぶなどになっている保育者主導型のところもあれば、子どもの人数が少なく保育者の関わりが密であるほど、汚れた物を自分で袋に入れる、自分で選んで着るということが月齢差関係なく個別に1つ1つのことを保育者と一緒に確認しながら身につけていることで子ども主体型で行われている面があった。

8 一斉活動「朝の会」

ここでは一斉活動の朝の会に着目する。

- (1) 【A園】 A園では机と椅子の自分の場所に座ってから、みんなでキーボードに合わせて歌をうたったり、絵本の読み聞かせを見たり、出席を取ったり、今日の活動、そのための準備などの説明もホワイトボードに描いて見せてその時に一斉活動として毎日同じようなスタイルの自席定型型で行われていた。やはり19人もいるため個々が集中して話を聞けるよう全体に話をする場面も視覚からもわかる工夫がされている。
- (2) 【B園】 B園では2歳児に話をするのも6名のため、集めて個々に十分話が伝わっているように感

じる。おやつ前ということもあり、朝の会では机のところで椅子に座って1歳児も一緒の状態、A園と同じように、キーボードに合わせて歌や手遊び、絵本の読み聞かせを見て、今日の活動やお手伝いのお当番の発表を聞いたりする、自席定型型ではあるが、手の届く位置に子どもがいることでしっかり目線を合わせて話しをするためA園と同じようなことでも個別へ伝わっていることがわかる。

- (3) 【C園】 C園は1・2歳児一緒に、おやつ後のため机と椅子に座っている。朝の歌や手遊びをして、お当番の発表や今日の活動が説明されている。今日のお当番はその日張り切っている子どもや元気の良い子どもにお願いしており無作為で選ばれる。C園でも自席定型型ではあるが、机、椅子という距離感と1、2歳児合同でという人数が増えることで個々への伝わり方へは再度個別に声かけをして行くことがある。
- (4) 【D園】 D園では2歳児6名だけで分けてのクラス運営がなされ、おやつの後なので、机椅子に座ったままで朝の歌や手遊び、絵本の読み聞かせを見て、今日の活動の説明を聞いていた。1つのテーブルに6名で座っていて、その間に保育者が3名入り、話すことで子どもと目線を合わせながら話していることから十分話しが届いている様子が窺えた。
- (5) 【E園】 E園では戸外活動の用意のことは0歳児1歳児の頃からのルーティンなことから、あえて言わなくても朝おやつ後には自らするよう身につけている。準備が出来てから朝の会としての絵本読みや手遊び、歌をうたうなど内容としては自由である。準備ができた子どもから好きなところに座るため保育室内の保育者の前の床の好きなところに座って2歳児5名だけではなく、全児で見たり聞いたりしている。0歳児に邪魔され怒ったり言い聞かせたりすることも見られているが、縦割り保育では0歳児1歳児の子どもへのお手本になっている。

- (6) 【考察】 8の一斉活動朝の会についてまとめると、下の表でもわかるように、その違いは場所に大きく現れ、おやつ後のテーブルに座位のままであったり、保育室内の所定の場所や保育者の周りならどこでも良いという自由度の違いである。だが、その違いにより保育者が子どもと目線を合わせて話す、子どもも目線を合わせて聞いていることでの話しの伝わり方、受け取り方にも違いが出ている。朝の会自体の設定も概ね朝おやつ後と時間的には共通している。どの園もその日の活動やその内容を知らせる場としても朝の会を活用していることがわかる。2歳児ならではのお手伝いとしてのお当番を知らせ当番活動をしているところは共通している。今日のお当番の発表や今日の活動そのものの説明、活動の準備の説明、今日の予定をどうしようかと話し合いするものとさまざまであった。保育者の決めた予定を発表するものから、今日はどういうことをしようか子どもと話し合いながら決めるものや前日の子どもやその日の体調などの様子から子どもと一緒に予定変更を決めていく日案の柔軟さも少人数ではあるようだ。

9 絵本

ここでは絵本について着目する。次の分類を使って検討していく。

表7 絵本時の分類型

一斉導入型	個別対応型
全体に一斉に読む	保育者の膝の上で個別または数人で読む

- (1) 【A園】 絵本の導入の仕方に最も違いが出ていた。自由遊び時には個別対応型で1回読んだり、子ども同士で見ることもあったが、主にはA園では自分の机上について椅子に座ってそれぞれが1回見ている、全体で見ることもあるが生活場面の転換時に用意の早い子どもが遅い子どもを待つために使用される一斉導入型で3回用いられていた。
- (2) 【B園】 B園でも自由遊び時に個別対応型で1回読

表6 朝の会の活動分類型

朝の会	場所	位置	活動内容
A園	自席	定位置	定型（月ごと）
B園	自席	定位置	定型（月ごと）
C園	自席	定位置	定型（活動変更可）
D園	自席	自分で座る場所は決める	定型（活動変更可）
E園	保育室床面	自由な場所	ほぼ定型（変更可）

んでもらうこともあるが、全体には机上で1回、部屋の隅の壁沿いに牛乳パックの長い椅子が置かれそこに子どもが横一列に座って一斉導入型で1回見ていた。『だるまさんが』を読むとその場で体を揺らして楽しそうに見ているが、『どてっ』と前に転ぶとまた自分の場所へ戻ってすぐ座る、自分の場所に戻るということが習慣化されているようであった。

- (3) 【C園】 C園でも自由遊びの時に膝に座って読んでもらう個別対応型で1回、一斉活動の前の導入に机上の椅子に座って一斉導入型として1回見ている。
- (4) 【D園】 D園でも自由遊び時には個別対応型で1回見ているが、一斉時には家庭的保育の雰囲気を残して床面の保育者の前に集まって自由に座って見ていて体を動かしたり揺らしたりも自由に個々で楽しめていた。絵本自体次の活動の前後に1回、一斉に話をする前に1回用いられ一斉導入型として用いられていた。
- (5) 【E園】 E園も自由遊び時には個別対応型で3回読まれていた。一斉時でも自由に保育者の周りの床面に座る。一斉導入型で1回全体に読む『だるまさんが』では自由に動いて体を揺らしたり動かしたりしながら、友達と楽しみながら見て次もまた自由に好きなところに座って続きを見る自由度があった。一斉時でも0歳児は読んでいる保育者の片膝に座って見ていて、1、2歳児はその前でその0歳児の様子を気にすることなく見ている様子から常態的に0歳児はその位置で見ていることがわかる。
- (6) 【考察】 9の絵本についてまとめると、絵本の使い方もさまざまであり、A園では用意や準備の早い遅いが出てしまうためその待ち時間に使われることもあったり、全員で見ることもあるが全体活動前の注目して欲しい場面で一斉導入型で使われていた。B園では同じ一斉導入型時でも近くで見られているが、決まった場所に座っていたり、保育者の膝で個別に見ることもある。C園、D園でも自由遊び時に保育者の膝で見ることもあるが、C園では次の活動の説明前に一斉導入型として使われることもある。D園では床面の保育者の周りに集まって好きなところで見る自由度がある。E園でも戸外活動前に用意ができた子どもから座って集まるが、一斉導入型として絵本を読んでも自分で好きな場所に座って見て、好きに動きながら友達と共感しながら見ることができ自由度がある。

10 戸外活動前の準備

ここでは戸外活動前の準備について着目する。次の分類を使って検討していく。

表8 準備時の活動分類型

一斉共有型	個別対応型
一斉に伝えるために視覚情報などを駆使し伝えようとしているが、子ども自身で聞き取れていない子どもには個別に声掛けをしている	1人1人に伝えることを前提に話しをしている

- (1) 【A園】 A園では一斉共有型で今日の活動を話し、用意するものこれからすることを小さいホワイトボードに図示して知らせ、その知らせ方もクイズ形式にして「これなあんだ？」と子どもに注目させて見せ視覚情報からも訴えている。用意の途中でも「次はなんだっけ？」と先ほどの図を思い出させる声掛けが他の保育者とも共有することができていた。
- (2) 【B園】 B園でも一斉共有型で声かけをするがその人数が少ない分個々への伝わり方が違いその声かけから、動いて自分で用意する子どもと先生に被せてもらって用意する子どももいたが、人数も少ないのですぐに用意することができていた。さりげなく保育者が靴下や帽子の向きを直していた。
- (3) 【C園】 インタビューにより伺ったことであるが、一斉共有型で声を全体にかけるが、やはり全体では伝わり方にも違いが出るため個別に声をかけ、自分でできることの帽子靴下などは自分で用意している。
- (4) 【D園】 D園でも一斉共有型で声かけをするが、自分で自分のロッカーに帽子や靴下を取りに行き、用意をしていた。わかっているも気分が乗らない子どもとは一緒にやったり保育者が手伝ったり、帽子、靴下の向きをさりげなく直していた。
- (5) 【E園】 縦割り保育で習慣化されていて、自分でサッと用意をしている。声をかけられても靴下の向きや帽子の向きの確認の声かけであった。2歳児では1日の流れもわかっているため、自ら考えて動いている姿であった。自分もやってもらった経験があるからか、靴下を履くことがまだできない1歳児の子どもの手伝いをしている子どももいた。
- (6) 【考察】 10の戸外活動前の準備についてまとめると、A園では一斉共有型でクラス全員に話しかけ

一度に全員に伝えようとするためのホワイトボードなどの工夫が見られたが、他園では子どもの人数が少ないために一斉共有型でも十分伝わるところも見られた。用意できなかつたり、気分が乗らない子どもには個別対応型で個別に話していたが、その子どものそばまで行き個々に関わり伝えることができていた。子どもへの声かけの個別の内容では用意そのものに対する保育者の声かけはE園は少ないが、その分靴下や帽子の着脱場面で「どっちが前かな？」と下に置いて1人ずつ個別に靴下の前後、帽子の前後の向きを話しながら進めている声かけが聞かれていた。

Ⅲ 指導案から見る保育内容の違い

指導案の様式は自治体からの様式を使用しており、E園以外どこも同じ様式であった。その構成は「前月の子どもの姿」「ねらい」「内容」「環境構成」「保育者の関わり」からなっている。E園も自治体からの様式を利用し

ていたが、昨年度より様式を変更して「予想される子どもの姿」をマッピングにして記している。分類としては、Ⅱの一斉活動型が多く見られたA、B園を一斉型と分類し、個別な対応が多く見られているC、D、E園を個別対応型と分類した。

1 指導案ねらいの文中に着目してみる

一斉活動型では園内の活動の中でその展開がなされることが多いことがわかり、それは同じ園の方針であるB園でもその傾向は見られ、園内での活動がメインで構成されている。一方、個別対応型では活動のメインが散歩であるため園外活動からねらいを設定されている傾向が見られる。そして、「ゆったり」や「保育者と」というワードが月案の中に出てくる回数が多い。それだけ日々の保育の中で「ゆったり」とした関わりが多く存在し、同年齢の友達の数が少ないためか「保育者と」が友達の役割も含めた関わりの重要な要素になっていることがわかる。

表9 指導案中語句のねらい分類型

9月のねらい	
一斉活動型としてのねらい	個別対応型としてのねらい
<ul style="list-style-type: none"> ・保育者に手伝ってもらいながら身の回りのことをしようとする ・保育者や友達と一緒に全身を使った遊びを楽しむ 	<ul style="list-style-type: none"> ・夏の疲れが出やすい時期なので、ゆったりとした生活リズムで元気に過ごせるようにする ・保育者や友達と、ごっこ遊びを通して全身を使って思いきり楽しむ ・水分や休息を十分に取り、残暑を健康に過ごす ・身の回りのことを自分でやってみようとする ・秋の自然に興味を持ったり、身体を動かして遊ぶことを楽しむ ・季節の移り変わりを感じ、秋の自然物に興味を持つ ・生き物が変化したことを知り、触れて遊ぶ ・保育者や友達との遊びを楽しむ

表10 指導案中語句の内容分類型

9月の内容	
一斉活動型としての内容	個別対応型としての内容
<ul style="list-style-type: none"> ・リズムにあわせて体を動かしたり、手遊びや季節の歌を楽しむ ・全身を使って、十分に遊ぶ ・保育者や友達に親しみをもち、自分から関わろうとする ・着脱の仕方がわかり、自分でしようとする 	<ul style="list-style-type: none"> ・思いきり体を動かして遊んだあとは室内でゆったりと過ごすなど、静と動の時間を作り、健康に過ごせるようにする ・保育者や友達と一緒に、お話やイメージの中でごっこ遊びを楽しむ ・気温を見ながら水遊びや散歩を楽しむ ・衣服の着脱や朝の用意など自分でやってみようとする ・気温に気をつけながら過ごす ・自分で今までとの変化に気付きながら散歩する ・保育者とのやりとり遊びを十分する中で、友達のことも意識するようになる

2 次は内容の文中について見ていく

内容については、やはり保育環境の違いもあり、月案からの全体活動をメインに考えられている一斉活動型と、生活面から丁寧に育みたい点に着目している個別対応型の違いが窺え、遊びの場面でもその時の気温や天気の状態に合わせて臨機応変に対応できることも窺え、人間関係では保育者とのやりとりや少数の子どもとの遊びで考えられているため、その活動自体にも人数の大小が現れている。

3 次は環境構成の文中を見ていく

環境構成では保育室の広さが環境構成に関わり、個の時間を設けることをどちらも必要と感じている部分ではある。散歩がメイン活動である小規模保育ではやはり環境構成に散歩のことが主に入っている。

4 保育者の関わりでの文中を見ていく

保育者の関わりでは、対人数の中での配慮事項が窺える。一斉活動型の保育では全体の中から子どもを把握していく工夫が記されていて、大人数のクラス運営ということのわかる書かれ方である。個別対応型ではクラスと

いう単位には満たない人数構成のため、生活面のことで個々へのより丁寧な関わりを意識した保育者の関わりが記されていたり、保育者も子どもにとっては大切な友達という役割を担っている部分も意識して書かれている。

5 考察

指導案の書き方には園の方針や理念などが反映されている部分もあるが、今回同じ2歳児を比較したことで、その文中の語彙からも保育環境の違いが出ていることもわかった。保育室の広さや園庭のある無しという物的環境の違いからもその指導案の立て方においては考慮すべき事項である。その環境ゆえの指導案では保育室環境の狭いところでは同じことはできず、園庭のあるところでは毎日散歩に出かけなくても戸外で遊ぶことはできるが、毎日散歩に出るからこそ培われている体力面や自然の変化への気づきなどが現れている。そして大きく違う人的環境からも2歳児というまだまだ並行遊びでありながらも、友達を求める時期に入っている子どもにとってクラス内に多くいる場合と保育者とのやりとりや言葉遊びをしながら家庭保育かのような大人との関わりの中で

表 11 指導案中語句の環境構成の分類型

9月の環境構成	
一斉活動型としての環境構成	個別対応型としての環境構成
<ul style="list-style-type: none"> ・季節の歌を取り入れたり、手作りの楽器を作って楽しさが広がるようにする ・体操、追いかっこ、ボール遊びを楽しむ ・1人1人の興味があることを把握し、関わりが持てる場をつくる ・スペースを確保し、身の回りのことがじっくり行えるようにする 	<ul style="list-style-type: none"> ・暑さから体力を消耗しやすいので、室内ではブロックやパズルなどの遊びを選んで楽しめるようにしておく ・イメージが広がるような絵本や音楽を用意しておく ・気温を見ながら無理のない遊びをし、水分、休息も取る ・着脱や朝の用意などがじっくりと取り組める時間を作る ・同じ散歩コースを選んで変化を感じやすいようにする ・虫網、散歩バックを持っていく ・集中して遊べるように場所を選ぶ

表 12 指導案中語句の保育者の関わり分類型

9月の保育者の関わり	
一斉活動型としての関わり	個別対応型としての関わり
<ul style="list-style-type: none"> ・楽しさが味わえるよう一緒に踊りながら盛り上げる ・保育者も一緒に体を動かし、楽しさを共有する。危険なく遊べるよう子どもの動きに留意する ・必要に応じて誘いかけ、友達と一緒に遊ぶ機会をつくる ・衣服の仕組みに気付けるよう、着方を丁寧に知らせる 	<ul style="list-style-type: none"> ・体を休めることの大切さについてもわかりやすく話していく ・子どもたちがどこを楽しんでいるのか、どこを盛り上げていくとより楽しめるかを見極めながら一緒に遊びを楽しむ ・子どもの変化に気付けるようにし、体調管理をしていく ・着脱の仕方や朝の用意の仕方など知らせていく。また、自分でできた時には十分に褒め、子どもの意欲につなげていく ・保育者と遊びを共有しながら、友達のことも意識できるようになっていく ・季節の小さな変化を知らせていくうちに、自分でも見つけられるようにする

日々過ごす場合では、人的環境からの指導案では全く考え方が違うことが現れていた。子どもが多くいるところは、より個別に対応できるような時間や場面ごとに個別に関わって対応することも考えられているし、少ない人数では近くの園に遊びに行つて同年齢児との交流を取り入れたりという工夫をしながら2歳児として同じような経験ができるような取り組みを意識的にされている。

IV おわりに

今回このような機会を持つことができビデオ撮影ができたことで改めて色々な保育の形で日々の保育が行われていることを再認識するきっかけになった。どの園も理念に乗っ取り設立時当初の背景や認可としての基準を満たしながら今の保育の形で運営されていた。

今回の調査の中で焦点化していない保護者支援としても、ビデオ分析から見ても朝の忙しい時間帯であるが保護者との関わりでは、小規模保育でも家庭的保育からの成り立ちから大切にしている園では、保育者の数も少ないため保護者と保育者が見知っていて、どちらからでも積極的に子どものこと家庭のことで会話されている。その際些細なことでも話したり、保護者の背景も知った上での会話であることから両者が積極的に関心を持って朝の時間でも話している。そのため園では子どものことも細かく保護者から情報を得ることができ、保護者には日々の保育を理解してもらえ、今回調査した園でも開園以来苦情などが出たことがないという結果を窺うことができている。保護者としっかり話し、育児に興味を持って楽しんでもらうことは、子どもだけではない密な関係性が保護者とも結ぶことができている。これは小規模保育としての役割の1つではないかと考える。小規模保育の担っている役割として今後も検討していきたい課題である。

今回は保育の内容を細かく分析していったが、保育者主導型が見られる園では、保育者の大きい園での保育経験や園の方針によるものが大きく左右している。保育者主導の一斉型での保育、保育園のように一斉型で子どもを動かし時間の流れを意識した保育では、その自由遊びの内容も遊び場所や遊ぶおもちゃの量でも保育者側の調整された環境で構成されている部分が窺え、おやつなども保育者主導型で進む部分も見られた。自由遊びや園庭での戸外遊びではそのルールの中で自由に遊んでいるが、子ども自身の「もうちょっと」には答えにくい保育になっているのではないかとこのところが見えた。絵本も自分のみたい本を読んでもらう回数もその日1日でも1回あるかないかの子どもも居て、それを1か月1年と

数えてみてもその個人が何冊保育園で自分だけに自分の好きな本を読んでもらえるのだらうと思える部分ではあり、個々の思いに寄り添ったり、その思いに答えにくい部分もあるのではないか。その反面、友達がたくさん居たりその中で言葉が発達したり遊びを発見、まねすることができ自分1人では考えられなかった世界を体験することができている。

個別対応型の園では臨機応変に変更可能な時間の流れで保育ができているところが、以前家庭的保育をやっていた園であることでもスムーズにできているところがあった。育児担当制を設けなくても、子ども自身から要望された保育者がそれに応え、納得いくまで遊び、自分のタイミングでその遊びに終わりをつけるようになる。そんな家庭であるかのような対応では、個々の子どもの思いに寄り添うことのできる人員が必要になってくる。個々の子どもの読み取りが重要になり、それを保育者間で常に共有することが出来ていなければ成り立たない部分になってくる。

今回、着目した2歳児の保育では、まだまだ個の遊びが十分必要で、信頼できる大人との関係の中で個を十分発揮して遊んでいく中で、徐々に周りの子どもにも目を向けていくような時を迎えている。育児担当制を設けているところもあるが、園生活すべてをその担当者が担当する家庭のような関わりは園として運営する上では難しい。だが、受入れ児童数も保育者の数も少ない小規模保育では自然とその環境で保育されている。保育室の環境も子ども自身もその環境の配置を把握しやすい構造となっている点も、保育者と子どもの距離や遊びのやりとりや言葉のやりとりとしてあらわれていた。

幼保連携型認定こども園教育・保育要領では「乳幼児期における自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心とすること」、そして保育所保育指針には「乳幼児期もふさわしい体験が得られるように、生活や遊びを通して総合的に保育すること」と書かれている。その要領や指針に依って保育し、子どもにとっても家庭により近い環境で行われる家庭的な保育実践としての保育では個々に寄り添い身近な保育者との愛着を拠りどころにして少しずつ自分の世界を広げていく時期を日々生きている乳幼児期の子どもにとって、どの子どもも同じ保育環境で同じ対応ではないはずである。家庭的な保育実践ができている保育では電車を見たい子どもに寄り添って、昨日も今日も電車を見に散歩に行くこともでき、それは他の子どもには興味のないことならば、他の子どもには「先に帰ってて良いよ」と1人の保育者がその子どもに寄り添って本人が納得して

みんなのところへ行くと言うまで電車を見ていることも日常としてなされていた。少人数、小規模であるがゆえの家庭的な臨機応変な対応で過ごすことで、乳幼児期にふさわしい環境の元で納得いくまで付き合ってくれる適度な生活環境、保育環境であり、それはいつも自己を満たしてくれ、そこにはいつも温かい眼差しがあり、自分の世界を少しずつ広げて来たらそこには共に遊ぶ適度な人数の友達もいる。そしてこの時期の保育のほとんどが生活すべてであるように食事や排泄、睡眠という生理現象も家で過ごすかのように個々に寄り添い自分の気持ちも受け入れてもらいながら生活習慣を形成していくこともできる家庭にいるかのような保育の実践ができる保育が無理なくできるのではないだろうか。

小規模保育を考えるにあたり、保育環境や人員配置も手厚く配置されているからこそ家庭での関わりに近い保育をしていくことが、小規模保育という保育では行えると望まれていることを念頭におきながら、園環境は様々で異なり、時間のあり方も人手のない中では難しいこともあるかも知れない。しかしながら「子ども理解」はどの園でも共通のワードであり、家庭より専門知識のある保育者により丁寧な子ども理解ができれば、個々にあったおもちゃの選定や配置、そして個々のやりたい、したい気持ちの読み取りに応えることはできるのではないだろうか。むしろ小規模保育ではその保育環境も人員配置の面でも家庭に近い保育だからこそ、子どもも園環境に緊張感を持つことなく家で過ごすかのように自己を発揮しながら、より子どもの1人1人に寄り添える環境であ

ることを改めて考えて提案したい。

今回この論文を書き、その理解がより深まり、0～2歳児の保育が自治体によっては家庭的から小規模保育へその需要の変化が著しいが、少人数での保育であることで個を重視した家庭的な保育実践ができる保育として考えていく契機としていきたい。

1 今後の課題

今回コロナ禍で園内への立ち入りを断られたり、撮影自体を受けていただけないこともあり、十分なデータ量を集めることができなかった。全国的な調査としてできていないことも課題が残っている。小規模保育の事業形態も様々で、色々な法人、株式会社、個人での設置したところなども調査できればもっと差異が出たのではないかと考える。時間的にも午前中のみ撮影だったが、一日撮影してみるとまた違いもみつけることができたかも知れない。対象年齢も今回は最も違いが出ているであろう2歳児に絞ったが、1歳児、0歳児でも調査してみる必要がある。どの保育が一番良いということではなく、0～2歳の乳幼児保育での園生活をどう捉えるかを考えていく上でも、もっと細かく分析していくことも今後の課題とする。

そして指導法を比べてから2歳児の保育にとって家庭的保育のような関わりで行う小規模保育の保育のどの面が良いと言えるのか、どういう保育のあり方が適切なのかも今後考えていきたい。

表13 園別分析表1

	保育環境	登園時受入れ	(ビデオ)	朝の用意	朝の自由遊び	排泄		手洗い	
						衣服	排泄時	手の洗い方	手の拭き方
A園	定員25名 (19名) 49.8m ²	保護者が室内に入ってきて用意をして出て行く	(1分～1分30秒以内) 保:「おはようございます」 親:「おはようございます」 と黙々と用意をする 保:「おはようございます」 親:「おはようございます」 やりとり1往復ぐらい	保護者がお画面、コップ、歯ブラシ、食事エプロン、カバンなど所定の場所へ置いていく	広い室内をウロウロしながら、ブロック、お人形、車、ままごと、絵本など自分の思い思いの遊びをしている 保育者ととなべなべそこめくと触れ合い遊びを楽しむ、それを順番待ちしている子どももいる 9:30(時計にちようちよが貼ってあり子ども気付ける工夫)みんなでお片付けですよと声をかけ片付け始める	トイレの入り口に棚があり、そこへ着替えオムツが置いてある。座って脱ぎ履きするスペースがある	一斉に促す パンツの子どもにはこまめに声掛けをする	外のテラスにあり、台に載って手を洗う。自分で洗っているが、丁寧に洗えているため、それ以前の指導が窺えた	ペーパーで拭き、拭いたかを先生とタッチして確認している。個別の指示をその時に1人ずつに言う
B園	定員12名 (6名) 49.76m ²	親子と一緒に保育者のいる保育室に入る。時間帯によっては早出対応の先生のみ	ピンポン 保:「おはようございます、どうぞ」 親:「おはようございます」室内に入ってくる 保:「おはようございます」子どもと遊びながら、顔を向け挨拶「○○ちゃんおはよう」 子どもは母親のそばにくっついて急いで用意する母親。片付けが終わると 親:「お願いします。」と出て行く 保:「行ってらっしゃい」「またあとでね」と子どもと一緒にバイバイする	保護者が着替え、食事タオル、靴下などを所定のところに入れ、最後にカバンも所定のロッカーに入れ最後にプールカードの記入をして出て行く	1歳児は抱っこされたりして過ごしている。2歳児は走り回ったり、保育士とのやりとりを楽しんでいる 1人の保育士と子ども2人(2歳児) 子:おままごとのハンバーグと絵の描けるおもちゃを持ってくる 保:「ハンバーグ持って来てくれたん?ありがとう」 子1:その板にグルグルを描き始める 保:「ハンバーグのお皿描いてくれたん?載せてもいいですか?」 子1:「ちやう、こっち」 保:「あっこきゃべつみたいやね、グルグルのどこ」 子:グルグルを指しながらさらに追加で描いていく 子1:「あつあつじゅうじゅう」 他の子どもが寄ってきて怒る 保:「なあにもしたらへんよ」	トイレの中で月齢によってずらして座る子どもと、椅子に座って脱いでから排泄する子どもがいる。月齢に合わせてたり個々に合わせてたりしている	一斉に促す	自分でブッシュ式石鹸を出して洗う。保育士はもう一方の手洗い場で1歳児の介助をしながら声をかけたり、きれいに洗い流せるよう声をかけている	水道上部にペーパータオルがあり、子どもがそこから引き出して拭き、ゴミはその下に捨てるところも構えられている
C園	定員19名 (3名) 54.11m ²	ワンフロアであるため、下足場所での受入れが保育室内から見える状態。時間帯によっては早出の先生が対応			2歳児はサークル内を走り回り、時折保育士に声をかけられる。1歳児は膝に抱かれ会話をしたり朝のリズムに乗り切れてないのか、膝の上で過ごしている	ずらして便器に座れる子どもはそのまま座る。トイレ内の着替えをする椅子に腰かけてズボン、パンツを脱ぐ	時間設定の時と子どもが自分から言ってくれた時	手洗い場に保育士がついて1人1人丁寧に洗ってあげる	すぐ後ろに手拭きタオルがあるため、そこへ拭きに行くがそこにも保育士が居て丁寧に拭いているか見て声をかけて一緒に拭いたりしている
D園	定員19名 (6名) 24.84m ²	玄関で受入れをし、子どものみ室内へ。時間帯によっては早出の先生が対応	玄関に保育者が待機 親:「おはようございます」 保:「おはようございます」「○○ちゃんおはよう」「お変わりありませんか?」 親:「特にないです」 保:「お預かりしますね、行ってらっしゃい」 聞き取りによる話	子どもと一緒に保育者が所定のところに置いて行く 聞き取りによる話		トイレ内でずらしでする子ども、トイレ内の椅子に腰かけて脱いでからする子ども様々	時間設定で促す時と、子どもが自分で言ったり保育士が子どもの尿意を察知した時に促す	保育者がすぐ後ろについて見守り、できにくい部分は手を貸したりしている。洗い残し、すすぎ残しには声をかけて促している	自分の手拭きタオルがタオル掛けハンガーにかかっているため自分で拭く。拭き残しなどは声をかけたり、一緒に拭いている
E園	定員8名 (5名) 29.82m ²	玄関で毎日同じ日中も保育している保育者が受入れ送りもしている	親:「おはようございます」 保:「おはようございます」「○○ちゃんおはよう」「どうしたん?昨日夕方遊んでて蚊にかまれたん?」 親:「そうなんです。お薬つけてあるんですけどね」 子どもは靴を脱ぐ 保:「○○ちゃん靴飛んで行ってもうたわ。びったんこしといたげて」 親:「ホンマやーほら○○これギョッとしたい」「できたな」 保:「ほな行こうか」「ママバイバイやなあ」 子:「バイバイ」 保:「ママ行ってらっしゃい」 子:「行ってらっしゃい」 親:「そんな言うてくれんの?そんな言うのまだまだ先やと思っただのにーうれしい、ママがんばれるわ」 保:「ママも○○ちゃんそんな言うてくれてうれいって」	カバンを開け、一つずつ、手拭きタオル、食事タオル、トイレタオル、着替え、(オムツ)、着替えを入れる袋、連絡帳、を出して最後にカバンを片付ける。わかなくなったり、ぼーとして時間がかかりすぎるようなら声をかけ一つずつ渡している	自分のやりたい遊びをするため自分でおもちゃを出してきて、遊ぶ。パズルをやると、自分のお気に入りの台を手伝ってもらって取って、その台の上でパズルをしている。 絵本を読んで欲しい子どもは保育士に読んでと持って行っている メルちゃんとお医者さんセットを手に持っていてお人形遊びを保育士としている 子:「お熱あるんです」 保:「そうなんですか?それは大変、どうしよ?」 子:「病院に行ってください」先生は病院のこれやってとせがむ 保:聴診器をメルちゃんに当て「お熱ありますね。どうしましようね」 子:「注射するのよ」 保:「そうですね。注射しましよるか」注射をうつ 子:患部をもんで「もう大丈夫やわ」	個々に応じて、立ってする子ども、ずらしてする子ども、保育室内で脱いでから行く子どもがいる パンツ、ズボンの履き方もお尻マット代わりのタオルに座ってする子ども、立って背中だけもたれて履く子どももいて個別に対応	時間で促す時と自分から行きたいと言った時	手洗い場の台に1人ずつ順番にできるよついでに手洗いも横で一緒に洗ったりこもも洗ってねと声をかけながら洗い、すすぎもきれいにすすぐことができるように声をかけ気付けさせるようにしている	手洗いの後ろに1人ずつの手拭きタオルがかけられているので、そこで拭く。拭き残しがあると声をかけたり、一緒にやっている

家庭的保育から小規模保育への変遷と動向

表 14 園別分析表2

	おやつ	衣服の着脱		一斉活動		
		衣服選び	着方、手伝い方	朝の会	絵本	散歩前用意
A園	人数により早い、遅いの差が大きいため絵本を読んで待っている。揃ったらおやつを配る。牛乳もおやつも一斉に渡す。袋菓子も自分で開けたり開けられるよう援助	保育士が選んで持って行く。嫌がる様子はない 自分で選んでおいでの声かけでできる子どもは選んで着替えようとしている	自分でやる子は置いていたら着替えるが、逃げ回る子どもは着せる	<おやつ前> ♪ごぎつねコンコン ♪どんぐりころころ 絵本 ♪朝の歌「先生おはよう～」出席をとる <おやつ後> 今日の予定を話す 用意するものをホワイトボードに描いて見せる	絵本をみる時は、待つという時に使われていることが多かった そのため自分の席について見ている 朝の自由遊び時には、膝に乗って読んでもらうことがあったが、1人で見る時も机に座って見えていた	ボードに図示されたものを意識してできるよう、声掛けをしている。 自分でできることはしているが、できないと来た時は対応して手を貸している
B園	保:「今日のおやつはねービスケット」 ♪おやつ之歌 いただきます 牛乳から配る 牛乳が飲み終わったら、ビスケットの入ったお皿を渡す その後お茶の入ったコップが出てきてそれを飲み、おかわりの欲しい子どもはおかわりをもらって、口拭きタオルをもらう。口が拭いたら自分の汚れたものを入れる入れ物にナイロン袋を開けて自分でセットして入れて保育士に渡す	こちらが持つていく。自分でロッカーから見つけられる子どもはそれを着る	自分でできる子どもは自分でしているが、まだできない子どもは手伝う	♪朝の歌 ♪あなたのお名前は「今日のお当番はーじゃーじゃん○○くん エブロン配るとかお水やりとかよろしくね」	壁に牛乳パックの椅子が置いてありそこへ横1列に座る。だるまさんな子どもが思わず乗って動いてしまってもまた、牛乳パックの椅子にすぐ戻る 横に長いので手遊びは保育士も横に2人並んでする	保:「お散歩行こうか」と言うと帽子を取って渡し、靴下の入った入れ物を置く そこからそれぞれの子どもが自分で帽子がかぶれる子どもは被り、無理な子どもは被せてもらう。靴下も自分の靴下を取り履ける子どもは履き、無理な子どもは履かせてもらう
C園		自分で服は選んでいる。決められない子どもには2つぐらい見せてどっちにする?と自分で選択する	自分でやりたいを個別のタイミングで進めて行く。服の前後も個別に関わり知らせて行く	朝おやつ後に、季節の歌をうたったり「今日のお当番は」と発表する	一斉活動の導入時の全員が椅子に座っている時に読む 自由遊びの時に読んでと持って来たら膝の上か何人かいたらすぐ前で個別に読む 聞き取りによる話	
D園	みんなが席についたら ♪おやつ之歌 いただきます 今日のおやつは「おせんべい」とおせんべいを配る おせんべいを食べたら、順番に牛乳をもらって飲む	自分で選ばせたり、2つもの提示して選択させたりしている	なるべく自分でやっている。自分でできたと感じるさりげない手伝いをする	おやつ後に椅子に座ったまま、今日の活動を話したり、お当番さんを発表したり名前を呼んだりする	シートの上に座るよう促し、そこへ保育士が絵本を持って行く ♪グーチョコキパーで何つくろう 絵本をそれぞれ見えるところに行き見る。保育士の膝に乗る子どももいる	自分のロッカーへ行き自分で必要な物を用意する 一緒に手を貸しながらする子どももいる
E園	おやつ、牛乳の両方が並んで口拭きタオルも配られたテーブルに座る。全員揃うまで待っている。(0歳児は先に食べることも) ♪おやつ之歌 いただきます 食べ終わった子どもから、「ごちそうさまでした」をしてお皿とコップを給食入口の台まで持って行く 口拭きタオルを自分のロッカーの上の汚れもの袋に入れていく	自分で着替えたいタイミングも決めているところ、汗をかいたし着替えようと促す場面とある 自分で服を選んで出し、着替えた服も袋に入れてカバンに入れる。忘れてたりすると声をかける	「こっち?」「こう?」と前後を意識しながら着替える。分からない時は下に置いて、「これがついてるの前やったな」「ここから〇が見えるのは前やな」「ズボンにはポケットお尻やな」と確認している 靴下も下においてかかとの部分を下にして履いたら上手に履けるんちゃうかなと促している	おやつの後や絵本の後に、お名前呼びや「今日のお休みは?」○○ちゃん、今日の活動の話をする	散歩の用意が出来たら思い思いのところに座る。そこへ保育士が行く ♪はじまるよったらはじまるよ～ 絵本が見えるところで好きに見ている。だるまさんが、では思い思いに動くがその場でまた座り直している	保:「お散歩行けるかな?」 子1:「お天気やし、行けるよ」 と言うとそれぞれが自分のロッカーに行き靴下と帽子を出してきて、履いたり被ったりして用意をする

文献

本田まり・西川貴子・下山亜美・永井久美子 (2015). 給食施設における食物アレルギー対応に関する実態調査から～保育園、家庭的保育施設等を中心に～, 神戸女子短期大学紀要論叢, 60, 141-149.

五十嵐裕子 (2017). 日本における家庭的保育制度の変遷と家庭的保育制度研究の動向, 浦和論叢, 56, 1-29.

伊藤知子・小野早苗・倉園安子 (2019). 1～2歳児を対象とした小規模保育園における食育の取組み, 帝塚山大学現代生活学部子育て支援センター紀要, 1, 27-44.

實川慎子・北田沙也加・栗原ひとみ・高木夏奈子・山田千愛・高野良子 (2020). 保育の周辺業務における保育現場の負担軽減と地域ボランティアの連携の可能性, 植草学園大学研究紀要, 12, 49-60.

小林美希 (2020). 保育園株式会社：職業としての保育2 (第5回) 疲弊する小規模保育, 世界, 927, 150-160.

幸田瑞穂・武田俊昭・吉次豊見・萩原文・横谷仁美・坂田由香里・山下鈴乃・遠藤由美子・藤丸明日香 (2020). 子どもの主体としての心を育てる保育に向けて (2) 自己充実欲求を視座に小規模保育のあり方を考える, 湊川短期大学紀要, 56, 31-38.

小山修・庄司順一・澁谷昌史・尾木まり・網野武博・福川須美・鈴木道子 (2008). 家庭的保育のあり方に関する調査研究 (3), 日本子ども家庭総合研究所紀要, 45, 85-91.

上月康代・幸田瑞穂・萩原文・横谷仁美・坂田由香里・山下鈴乃・遠藤由美子・藤丸明日香 (2020). 小規模保育園における自然とのかかわりによる乳幼児の育ち：園外保育のドキュメンテーションの試みから, 湊川短期大学紀要, 56, 39-46.

中村ミサ (1990). 小規模保育所における保育方法の実践的検討：子どもの自主的活動と職員集団の援助との関係, 日本保育学会大会研究論文集, 43, 56-57.

成木智子 (2020). 小規模保育園における保育士間連携の考察 (1), 神戸海星女子学院大学教育研究紀要, 4, 19-22.

新川朋子・中山徹 (2018). 子ども子育て支援新制度の小規模保育における先取り事業の実態調査, 太成学院大学紀要, 20, 85-92.

本橋初江・井桁容子・小野明美・佐々木聡子・跡見一子・宮崎照子 (1983). 小規模保育所の保育の評価：3歳未満児保育

のあり方について, 日本保育学会研究論文集, 36, 76-77.

佐々木啓子 (2021). 秋田県における小規模保育士施設の現状と課題, 聖園学園短期大学研究紀要, 51, 61-73.

佐野裕子・高尾公矢 (2015). 3歳未満児の健康生活に関わる家庭的保育者の支援：生活習慣形成を手がかりとして, 聖徳大学研究紀要, 26, 47-53.

辻川ひとみ・吉住優子 (2019). 小規模保育事業実施の現状に関する基礎的研究, 帝塚山大学現代生活学部子育て支援センター紀要, 4, 79-86.

辻川ひとみ・吉住優子 (2021). 小規模保育施設における保育運営と施設計画に関する基礎的研究, 帝塚山大学現代生活学部紀要, 17, 18-26.

藪晶子 (2020). 小規模保育所での子どもの自発的な造形活動の実践, 大阪芸術短期大学部紀要, 44, 11-20.

米倉裕希子・永井久美子・佐藤知子 (2019). 小規模保育及び家庭的保育の事業者及び保護者調査からみる地域型保育の現状と課題, 関西福祉大学紀要, 22, 39-48.

吉次豊見 (2020). “場”が保育者に及ぼす影響に関する一考察：商業ビルの一室に設けられた小規模保育施設の事例から, 関西教育学会研究紀要, 20, 1-15.

付記

本論文は筆者の大阪総合保育大学大学院児童保育研究科児童保育専攻博士前期課程における令和2年度修士論文「大規模園と小規模園の理念と方法－S県内2歳児の保育場面の比較分析を通して－」を元に加筆修正したものである。なお、本論文に開示すべき利益相反状態はない。

謝辞

本論文に作成に当たりビデオ撮影にご協力いただきました各園には深く感謝申し上げます。そして論文を作成するにあたり、御助言いただきました大阪総合保育大学大学院の故玉置哲淳先生、大方美香先生に心より御礼申し上げます。

Transition and Movement from Familial Childcare to Small-Scale Child Care

Yuka Ooe

Osaka University of Comprehensive Children Education Graduate School

To manage the volume of children on waiting lists, the number of small-scale childcare centers that can house children aged 0-2 years has been on the increase in recent times. Small-scale childcare centers take in small numbers of children aged 0-2 years; thus, it is said that the care practices in these centers resemble that of familial childcare. Although there are a few studies on transitions in conventional home-based childcare centers and quantitative surveys of small-scale childcare centers, there are no surveys on the characteristics of the childcare. This study explores the qualitative characteristics that define the “familial childcare practices” by focusing on small-scale childcare centers. As stated in the 2018 revision of the Child Care Guidelines for Childcare Centers, the study will highlight the settings that nurture children’s individuality through daily infant care and play and the roles played by care providers.

Key words : Familial childcare, Small-scale childcare, Childcare for minors, Infant and toddler childcare